石村　実 ISHIMURA Minoru

私は「触覚性絵画」というテーマをかかげて、このところ制作を続けています。

それはモダニズム以降の絵画が、視覚を優先するあまりに　行き詰ってしまっている、と感じているからです。かつて哲学者の中村雄二郎は、視覚優先の近代性を打破するために、「共通感覚」という古代ギリシア哲学にまでさかのぼる考え方を提唱しました。その上で触覚の重要性をいまこそ認識するべきだと書き残したのです。

その「共通感覚」とは人間の五感を統合するような感覚のことです。ふだん私たちは五感を関連付けながら生きているのですが、いつしかそのあたり前のことが、なおざりにされてしまいました。そして近代科学の発達とともに、私たちは物ごとをバラバラに分析して、それを操作して活用することばかり重視してきたのです。その結果、私たちの生活は格段に便利になりましたが、失われたものも大きかったのだと思います。

視覚を重視したモダニズムの絵画は近代科学と同様に分析的に絵画を扱いカント風に言えば「自己批判的」な考え方によって目まぐるしくその形を変え、発展してきました。しかし、すでにその方法論は限界に達し、暗い袋小路に入ってしまいました。

私はそのようなモダニズムの絵画の世界を逍遥した経験から、中村雄二郎の「共通感覚論」の考え方を見直すことにしました。そして彼がとりわけ触

2020 年　「触覚性絵画　すみれが丘の木立」　F60 号　油彩、画布

2020 年　「触覚性絵画　すみれが丘の木立」　F60 号　油彩、画布

覚を再認識せよ、と言ったことを手掛かりにして、「触覚性絵画」を制作しているのです。

　そしてさらに私は、触覚を重視した絵画を制作するためには、絵具の物質性や手触り感に加えて、絵画制作における「時間性」にも注意を払わなくてはならないと感じています。私は美術作品における「時間性」は、現実の生活の中で私たちが感受している時間を超越したものでなければならない、と考えています。

　例えば絵画を制作するに際して、画面上に私の手順通りの時間が見えてしまうのではだめなのです。絵画における「時間性」は、現実の時間とは独立した、自由な時間でなくてはなりません。私は必要に応じて、時間を自由に行き来し、ときには過去をまさぐり、ときには現在を過去へと送り返しながら制作しなければなりません。

　今回の展示においては、私はこの三年ほどの作品の中から「絵画における時間性」という問題にふさわしい作品を選び、新作とともに並べてみたいと思っています。

　そしてこの「時間性」の問題は、現代芸術における批評の問題としても、取り上げていくべきだと考えています。それは私の　blog「平らな深み、緩やかな時間」の中で継続していきますので、ときどきそちらをご覧いただければありがたいと思います。

2020 年「触覚性絵画　No.6」　　F60 号　油彩、コラージュ、画布

2020 年　「触覚性絵画　No.7」　　F60 号　油彩、コラージュ、画布

blog「平らな深み、緩やかな時間」　(https://blog.ap.teacup.com/tairanahukami/)

石村ホームページ　(http://ishimura.html.xdomain.jp/)